

自由部門 優良賞「私のもだち」

文学部日本文学科 4年2組 川村 夏美

どんなに固い絆を結んでも、大切な約束をしても、友情を裏切ってしまうことが人生にはあると思う。大げさに聞こえるかもしれないし、そんなことは無いという人もいるだろう。これは私といつまでも私に退屈を許さない“ともだち”の話。

小学2年生にして私の前に試練が立ちはだかる。父の仕事の関係で中国の首都、北京に引っ越したのだ。立ちはだかったのは言葉の壁だった…と言っても、私が転校したのは日本人学校で中国語を話さなければならなかったわけではない。私に要求されたのは正確な標準語を話すことだったのである。様々な出身の者が集まったはずが日本語の成り立ちをなぞったかのように彼らは標準語に染まり、広島弁を使う私はからかいの対象だった。とにかく自然に標準語を話せるようになるまでは田舎者と嘲笑され、方言の特性からいつも怒っていて怖いと陰口を叩かれ倦厭された。そんな中で私と真っ先に友達になってくれたのが“本”だった。毎学期クラスメイトの顔と名前がジャグリングのように入れ替わる中で図書室の本だけはずっと変わらなかった。方言を笑うこともなければ恐れることもなく、沢山の世界や人に会わせてくれた。読めない漢字は辞書を引き、私は図鑑に伝記に小説、絵本ありとあらゆる本を読んだ。図書室の本は膨大で全てを読むことは不可能だったけど図書室の貸し出しカードに名前を書きこんでいくのは冒険の軌跡を残すようで楽しかった。広島に戻ってきてもその生活は続いて、友達と駆け回る野山と静謐で誰も知らないものが隠れた図書室を往復して過ごした。寝ても覚めても、とにかく本が大好きで仕方がなかった。

しかし私は、ある日本が読めなくなった。中学3年生の夏、受験に向けてギアチェンジという時期だ。私は病気にかかり、学校を休まざるを得なくなった。散々な気分だった、いったい私が何をしていたというの？と誰かを問い詰めたくなるような時間を幽霊のようにぼうっと過ごしていた。それでも療養に読書は付きものだと、本を開いた。全く読めなかった。子どもが古典の品詞分解を必死になってしているようで、書いてある内容が全く理解出来なかったあのぞっと皮膚の下が冷える感覚をまだ覚えている。

あの時は、「本まで私を見放すのか」と思った。絶対に裏切らないと思っていた存在に裏切られることがこんなに痛いと思わなかったし、怒りさえ感じた。感情移入をして涙を流して本を読んだことは沢山あったが、何を読んでも文字の羅列が心に訴えかけてくるものが無いだなんて生まれて初めてのことだった。それから私は絶交と言わんばかりに本とは距離を置いて、本棚にも埃除けの布を長い時間かぶせることになる。

病気の治療に専念するために普通科の高校から出席日数を気にしなくてもいい通信制の高校に編入したのはそれから間もなくのこと。病院の長い待ち時間も何もせずぼうっとし

ている私を気遣ってか父はよく私に本を薦めた。私の父は熱心な読書家ではなかったが通勤時間の暇を持て余して本をよく読んだ。半年に一度は積み上げた文庫本の山で雪崩を起こしては売り、また山を作ることを繰り返す人だった。その中から時折面白かった話を私に寄越すのだが、やはり読めない。そんな本は読んだふりをしてそっと返した。「つまらなかった」と言って。そういうやり取りを何度か何冊か重ねた。

今となってはその本を開く気になった理由を思い出すことができない。父が興奮気味に「面白かった！」と言って薦めた本だった。うんざりするほど退屈していたのかもしれないし好奇心が背中を押したのかもしれない。ただ、ある日突然本が読めなくなったように、ある日突然本を読めるようになったのだとしか説明できない。夢中で^{ページ}頁をめくってめくってめくって、あっという間に1冊読破した。父の文庫本の山から同じ作者の本を探して読んだ。眼から鱗が何枚も落ちて新品の眼になったのだ、と言われても信じてしまうくらい読書が楽しくてたまらなかった。

ああ私の“ともだち”が帰ってきた。そう私は長い時間「絶交した友人が帰ってきた」と都合のよい勘違いに浸っていた。気付いたのは大学生活の後半にさしかかる頃、本を読んでいる時にハタと考えた。裏切ったのは「本」ではなく「自分」の方ではなかったか、と。本の中身が突然変わるはずがないことは私自身分かっていた。それでもあの時「本」が裏切ったと思わなければ「大好きな本を拒んだ自分」を「自分」が許せなかったのではないか。

闘病中も他人と違う高校を選んでも、今も“本”が繋いでくれた人たちが私のことを支えてくれた。私は“本”を裏切り者扱いし、一方的に疎み遠ざけたというのに形のない余りある財を雨のように与え続ける。本当の友情だとか仲直りの方法を説教したいわけじゃない。ただ、面白くて時々意地悪になって、物知りで私を退屈させることが無い私の“ともだち”を、その“ともだち”との一生で一番の仲違いの話を少し聞いて欲しくなった。

<講評>

読書が大好きな少女が、突然本を読んでも活字が頭には入らなくなってしまい、そしてまた唐突に読めるようになったという体験は興味深い。読めなくなったのは闘病中で、そのときの読めなくなったときに感じるゾットする感覚がよく伝わってきた。「本」を「ともだち」と擬人化する意表を突く比喻によって引き込まれる筆者の世界観は、一旦はネガティブな出来事から始まり、さらに暗い深みへと沈み込んでいくのであるが、もがき苦しみながら越えていったその先に、自ら光を見いだしていく様が語られるとき、読者も救われ、安堵感を覚える作品となっている。筆者の体験と繊細な感性をぜひ多くの学生と共有したい。加えてこのエッセイでは、読書と言うものの楽しさとある種の不思議さについて、自分の子供の頃の辛い体験に根ざしつつ、かなり格調の高い文章で歯切れよく語り尽くしており、本人の心の動きを快活に表現できている。若者の活字離れが言われて久しいが、チャットにしか興味のない若者達に読ませたいエッセイである。多少力が入りすぎたところもあるが、生涯の「友」を得られた喜びが十分伝わる。父親との葛藤をからませた、心の友との付き合い方が表現されればなお訴える力が加わるのではないだろうか。

審査委員／吉目木晴彦、八木秀文、大庭由子、小倉有子、富岡治明（委員長）